



慶應義塾大学ビジネス・スクール

劇団ふるさときゃらばん

劇団ふるさときゃらばんの公演に行くと、普通の演劇公演とは大きく違うことに気づく。5
その男性客の多さである。小劇場系の劇団の公演によっては男性客中心というのがある。
しかし、ふるさときゃらばんがミュージカル劇団であると考えれば、その客層は異様であ
る。「男のロマン女のフマン」の平日夜の公演では、ネクタイ姿のサラリーマンが半数近く
を占めている。普通の公演でも開演時間に遅れてくる人はいるにはいるが、この公演では
開演後に次から次へと人が入ってくる。そしてさらに驚くのは、幕が降りてからのスタンデ
10
ィング・オベーションである。「ニッポンのサラリーマン」が、なぜそこまで入れ込むのか。
ふるさときゃらばんは、ターゲットとしては開拓不可能とまで思われていた男性客をどの
ように動員しているのだろうか。また、「農村」や「サラリーマン」などは、ミュージカル
の題材としては不向きと思われるのに、なぜそれが受け入れられるのか。そういった題材
そのものを、どのようにして掘り起こしているのか。 15

第三場ではふるさときゃらばん成功の要因を分析するために、まず第一節でふるさときゃ
らばんの軌跡をたどり、第二節ではその組織構造と運営形態を、第三節ではオリジナル・ミ
ュージカルを生み出す源泉である制作活動に焦点をあて、第四節では顧客維持戦略について
取り上げる。最後にふるさときゃらばんの今後の課題についても考えてみたい。 20

劇団ふるさときゃらばんの軌跡

劇団四季は学生演劇を母体とする新劇団として出発したが、ふるさときゃらばんの主な創立
メンバーは真山美保率いる新制作座出身である。真山美保は演出家・劇作家であり、真山青
果（1866～1948）の子である。彼女は日本女子大卒業後、前進座文芸部からすると純粋な新
25
劇団とはいえない位置づけにあった。現在ふるさときゃらばんの脚本・演出を担当する石塚
克彦が、新制作座の中であって最初にミュージカルを創った時には大変だったという。劇団
員からも観客からも非難轟々で、結局彼の処女作である「天国と地獄'70」はわずか7回の
東京公演で幕を閉じた。石塚は、チケット代を払って観て、帰りに暗くなるような芝居では

脚注このケースは慶應義塾大学ビジネス・スクール和田教授の指導の下に、慶應義塾大学文学部特別研究助
手川又啓子がクラス討議の資料として作成したものであり、経営状況の適否を例示しようとするものではない。
(1999年2月)